

# 2017年生物多様性日本アワード 優秀賞受賞!!

2017年9月、「トンボはドコまで飛ぶかフォーラム」は、「第5回生物多様性日本アワード・優秀賞」(公益財団法人イオン環境財団)を受賞しました。  
全国78件の応募の中から優秀賞(5団体)に選ばれたことは、私たちの1つ成果と受け止め、支えて下さっているみなさまへ感謝を申し上げます。

受賞に際しては、産学官民の連携で活動を15年に渡り継続し、都市部での生物多様性への取り組みに1つのモデルを示したという点を評価していただきました。ここで、私たちが何を目指し活動してきたかを、生物多様性をキーワードにして記しておきたいと思います。

## 横浜の自然環境と京浜工業地域

横浜の自然環境の特徴は大きな川こそないものの、谷戸を源流域とした中小河川が樹枝状に発達し、大半が源流から河口まで市内で完結していることです。かつて、谷戸の低地は谷戸田と呼ばれる水田がつけられ、台地上の平らな土地は畑が拓かれ、斜面は雑木林として利用されてきました。人の営みによってつくられた生態系豊かな典型的な里山でした。

こうした風景は昭和30年代後半からの高度成長以降急速に失われ、現在では横浜の緑率は30パーセントを切っています。

一方で、私たちが活動の拠点としている臨海部は、前浜と呼ばれる干潟を、明治開国後に日本でもいち早く埋め立ててつくられた「京浜工業地帯」です。意外にもこの工業地帯には法律で一定規模の緑地の設置が義務づけられているため、工場・事業所毎に広大な緑が存在しているのです。

## 生物多様性とはなにかを改めて考える

### ■生物多様性とはなにかを改めて考える

近年では環境保全活用は市民権を得て、失われた自然を再生することも特別なことではない時代です。しかし、生物多様性という視点で自然を守ろうとする時に「希少種」や「原生林」などが注目されるケースが多く見られます。もちろんそれも大切ですが、私たち「トンボはドコまで飛ぶかフォーラム」ではかつて人里に当たり前にいた生物——たとえばチョウやバッタ、そしてトンボなどが街中に普通にいるような環境を呼び戻すという視点を大切にしたいと思います。

## 横浜の生物多様性のために

### ■横浜の生物多様性のために

当フォーラムが活動を続けた結果、企業緑地や公共緑地が内陸部の樹林地の代わりとして、またトンボ池が水辺(ため池や水田)の代わりとして使われており、京浜臨海部の人工的に作られたビオトープ空間が里山環境の代わりをしていることが分かってきました。

周辺環境の改善も進み、参加する企業や公共用地(公園、学校、水再生センターなど)でのエコアップ(生物の生息環境に配慮した質の改善)も進んできました。

昆虫類の食物連鎖の頂点にいるトンボが工場地帯で生活をしていることは、その地域の生物多様性が豊かである証拠であるとも言えます。成果については冒頭の調査結果ダイジェスト(P1)をご覧ください。

都市部の環境再生、都市の中での生物多様性の保全、再生の取り組みに対して評価をいただけたことをうれしく思います。



左よりイオン環境財団理事長岡田卓也氏とフォーラム参加企業(マツダ(株)岡康治氏、キリンビール(株)横山文彦氏)



木製の賞状をいただきました



田口正男先生による受賞者プレゼンテーション



生物多様性とは

環境省のHPでは、『生きものたちの豊かな個性とつながりのこと』と簡潔に述べています。生物多様性条約では、「生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性がある」としています。つまり、多様な種類の生物が暮らしている場所があること、多様な種類の生きものがあること、そして、同じ種類の生きものでも(遺伝子レベルでの)多様性があることということです。